

よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



26

よろこびの知らせ
第26集

目 次

アベルの信仰	1
創世記 4:1-4	
ノアの信仰	10
創世記 6:18-22	
アブラハムの旅立ち	19
創世記 12:1-4	
人を富ませるお方	28
創世記 14:14-24	

ここに収められたメッセージは、2021年10～11月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

アベルの信仰

創世記 4:1-4

4:1 人は、その妻エバを知った。彼女はみごもってカインを産み、「私は、主によってひとりの男子を得た。」と言った。

4:2 彼女は、それからまた、弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。

4:3 ある時期になって、カインは、地の作物から主へのささげ物を持って来た。

4:4 また、アベルは彼の羊の初子の中から、それも最良のものを、それも自分自身で、持って来た。主は、アベルとそのささげ物とに目を留められた。

きょうは創世記 4 章からカインとアベルのことを学びます。ここには人の死のはじめ、神なき社会のはじめ、そして、信仰復興のはじめが書かれています。

一、アベルのささげ物

アダムとエバがエデンの園を去ってのち、ふたりの男の子が相次いで生まれました。兄のカインは農夫となり、弟のアベルは羊飼いとなりました。3-4 節に「ある時期になって、カインは、地の作物から主へのささげ物を持って来た。また、アベルは彼の羊の初子の中から…持って来た」とあります。聖書は、カインやアベルの成長の様子や、アダム一家の生活のことなど、なにひとつ書かないで、いきなり、二人がしたささげ物のことを書いています。それは、聖書が人を、神との関係で描いているからです。聖書には様々な人物が登場しますが、その人がどんなに有能であったか、どのような偉大なこと

をしたかではなく、どれほど神に近かったか、神に信頼したかを記しています。神が人に求められるのは、何よりも信仰だからです。ささげ物をして礼拝するという信仰の行為に、その人の生きる姿勢が表れます。それで、聖書は、ここで、カインとアベルのささげ物のことを書いているのです。

カインは収穫した作物の中からささげ物を持ってきました。アベルは羊の初子を持ってきました。神はカインのささげ物よりもアベルのささげ物を喜ばれました。どうしてでしょうか。神へのささげ物は動物でなければならず、穀物ではだめだということでしょうか。そうではありません。神が後になってイスラエルの人々に与えたささげ物の規定の多くは動物のささげ物に関するものでしたが、穀物のささげ物のことも書かれています。これらのささげ物は祭壇の上で焼かれ、その煙が天に上っていくとき、人々は祈りをささげました。祈りが煙とともに天に上り、神に届くことを願ったのです。天の神は、ささげ物だけでなく、そこに込められた信仰と祈りを喜ばれたのです。

アベルのささげ物が受け入れられたのは、そこに彼の信仰と祈りが込められていたからです。4節に「また、アベルは彼の羊の初子の中から、それも最良のものを…持って来た」とあるとおり、彼は、どの子羊でもいいからと、適当にささげ物を選んだのではなく、注意深く、いちばん良いものを選びました。新改訳第二版は、ささげ物を「持って来た」というところに、「それも自分自

身で」という言葉を補っています。アベルが「みずから進んで」ささげ物を持ってきたことを表そうとしたものです。一定の日にささげ物をして、神に感謝と祈りをささげることは、おそらく、アダムが子どもたちに教えたことだったでしょう。アベルは、羊の群れを祝福し、増やしてくださった神への感謝にあふれて、進んでささげ物を持ってきました。それで神は「アベルとそのささげ物とに目を留められた」のです。ここに、「アベルとそのささげ物」という順序で書かれているように、神はまず、その人の心をごらんになり、それからささげ物をごらんになるのです。

ヘブル 11:4 にこうあります。「信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神にささげ、そのいけにえによって彼が義人であることの証明を得ました。神が、彼のささげ物を良いささげ物だとあかししてくださったからです。」アベルのささげ物が神に喜ばれたのは、アベルがそのことを信仰によってしたからです。スポーツでは、競技で良い成績を取めなければ賞を得られません。審査員はその人の能力を見ますが人柄は見ません。しかし、神は違います。私たちがした何かではなく、それをした私たち自身をごらんになります。私たちがしたことがどんなに小さいものであったとしても、まごころから神のためにしたことであれば、神はそれに報いてくださいます。この世のどんなものも決して及ぶことのない栄誉で報いてくださるのです。

二、カインの罪

カインは、ささげ物を吟味することなくそれを持ってきました。また、それがアダム一家のしきたりだからというので、義務的に、心のこもらない形ばかりの儀式を行っただけでした。ですから、ささげ物をしてカインの心には満たされるものがなく、彼は暗い顔をしたままでした。ところがアベルの顔には喜びがあふれていました。カインはそれを見て、神が「アベルとそのささげ物とに目を留められた。だが、カインとそのささげ物には目を留められなかった」ことを悟ったのでしょう。そうであるなら、カインはどうすべきだったのでしょうか。神への誠実な心と信仰がなかったことをおわびして、信仰を祈り求めるべきでした。アベルの模範に見習って、次の礼拝のときに備えればよかったです。ところが、「カインはひどく怒り、顔を伏せ」ました。「顔を伏せる」というのは、本来は悔い改めの姿勢です。イエスが話された「パリサイ人と取税人」のストーリーで、パリサイ人は天を仰ぎ、手をあげて神に祈りました。当時、ユダヤの男性はそのようにして祈ったのです。けれども取税人は「目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて」（ルカ 18:13）祈りました。うなだれ、胸を叩き祈る姿勢は、悔い改めの心を表しています。パリサイ人は天を仰ぐ姿勢をとっていましたが、実際は自分の宗教生活を自慢しているだけで、神を見上げてはいませんでした。取税人は顔を伏せてはいましたが、神の御顔を求めていました。心では神を見上げていました。カインもそ

うすべきでした。しかし、カインが顔を伏せたのは、自分の暗い顔を隠し、神から目をそらすためでしかなかったのです。そしてカインは自分の怒りや憤りを兄弟のアベルに向けました。アベルに襲いかかって彼を殺してしまったのです。

このとき、人類ははじめて人の死を体験しました。神はアダムに「それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ」（創世記 2:17）と言われましたが、その「死」を、わが子とその兄弟を殺すという出来事の中で見ることになったのです。カインがアベルを殺して逃亡したのを知ったとき、アダムもエバも、最初は呆然とし、それから深い悲しみを長い時間味わうことになったことでしょう。

普通は子どもが親を看取ります。その場合でも、悲しく、寂しく、その心の痛みが残るものですが、親が子どもの死を見ることほど辛いものはありません。私が知っているある人は、息子さんが亡くなってから、記憶が混乱し、ひとりでどこへも出かけられなくなりました。他の人が「息子さんが亡くなってさみしいでしょう」などと言うと、彼女は「うちの息子は家で元気にしていますよ」と言うばかりでした。

自分の子が犯罪の加害者となった場合は、親はもっと苦しむことでしょう。殺人を犯した人の母親が、「あの子が人さまを殺すなんて。あの子が誰かに殺されたほうがよかったのに」と言っているのを聞いたことがあります。アダムは、自分の子のひとりが犯罪の加害者にな

り、もうひとりが被害者になるという二重の苦しみを受けてきました。そして、その苦しみの中で、「罪の支払う報酬は死である」という厳粛な事実を目の当たりにしました。この出来事は、人類の悲劇のはじめです。そしてそれは今にいたるまで続いているのです。

三、セツの子孫

さて、カインは逃亡して「ノデ」の地に住み、彼の子孫はその地で増えていきました。16節に「それで、カインは、主の前から去って…」とあるように、カインはアダム一家から離れて遠いところに住んだだけでなく、彼は神からも遠く離れ去り、神を信じ、礼拝することをしない人々の群れが始まったのです。「ノデ」は神を持たない最初の町、「世俗都市」のはじめとなりました。

19節にカインの子孫のレメクのことが書かれています。「レメクはふたりの妻をめとった」とあるように、ここでは、神が定めた一夫一婦制が崩れています。レメクはふたりの妻にこう言いました。「アダとツィラよ。私の声を聞け。レメクの妻たちよ。私の言うことに耳を傾けよ。私の受けた傷のためには、ひとりの人を、私の受けた打ち傷のためには、ひとりの若者を殺した。カインに七倍の復讐があれば、レメクには七十七倍。」(23-24節) 古代の法律に「目には目を、歯には歯を」というものがあります。これは報復を勧めているものだと誤解されますが、実際はその逆で、自分の受けた被害以上のものを加害者に報いることを禁じ、過度な報復を戒めているものです。ところがレメクは「私の受けた傷のために

は、ひとりの人を、私の受けた打ち傷のためには、ひとりの若者を殺した」と言ってはばかりませんでした。

「カインに七倍の復讐があれば…」というのは、カインが逃亡するとき、神がカインをもあわれんで、「だれでもカインを殺す者は、七倍の復讐を受ける」（15節）と言ってカインの命を守ってくださった言葉に基づいています。神を締め出したカインの子孫にも神の言葉が言い伝えの中に残っていたのです。ところが、レメクは「カインには七倍かもしれないが、レメクには七十七倍だ」と言って、わずかに伝えられた神の言葉しているのです。暴力による社会の支配を正当化しているのです。神を持たない社会の行き着くところは、人々を軍隊で圧迫して従わせる社会となります。赦し合い、与え合う社会ではなく、傷つけ合い、奪い合う社会となっていくのです。

そして、残念なことに、今、そうした社会が次々と生まれています。ドイツ、フランス、イタリアなどヨーロッパ諸国はフランク王国から生まれたのですが、フランク王国の国王たちは、かつてはキリスト教の擁護者でした。ところが、マルチン・ルターを生んだドイツでさえも信仰が形ばかりのものになってきました。フランスでは教会が観光の場所ではなくなり、イタリアでは世俗化が進んでいます。神を信じる人々によって建てられ、連邦や各州の憲法に神の御名をかかげているアメリカでさえ、神を信じようとしなない人々が大きな力を持つようになりました。

ロサンゼルスは「天使の町」という意味です。百年も前のことですが、ある国から来た宣教師が、ロサンゼルスのダウンタウンに犯罪がはびこっているのを見て、「ここは『天使の町』でなく、悪霊の町だ」と言って嘆いたことがありました。もし、その人が、ロサンゼルスに限らず、今のアメリカの大都市を見たら、もっと驚き、嘆くかもしれません。私たちは、この国、この州、この町が、カインが作り、レメクが支配したノデのような神なき国、世俗都市となることがないように、祈りたいと思います。

私たちがそう祈ることができる希望の言葉が 25-26 節にあります。「アダムは、さらに、その妻を知った。彼女は男の子を産み、その子をセツと名づけて言った。『カインがアベルを殺したので、彼の代わりに、神は私にもうひとりの子を授けられたから。』セツにもまた男の子が生まれた。彼は、その子をエノシュと名づけた。そのとき、人々は主の御名によって祈ることを始めた。」アダム夫妻に三番目の男の子が生まれました。セツは成人して子どもを生み、その子をエノシュと名付けました。聖書は「そのとき、人々は主の御名によって祈ることを始めた」と言っています。「主の御名によって祈る」は、ストレートに訳すと「主の御名を呼ぶ」です。主に向かったの篤い祈りを連想させる言葉です。カインの子孫が神から離れていった一方でセツの子孫が神に近づいていったのです。アダム一家に信仰のリバイバルが起こったと言ってよいでしょう。神は、いつの時代にも、

神を信じる人々を残していただきます。どんなに多くの方が神から離れていったとしても、神はなお、神から離れることのない人々を残していただきます。その人々が地の塩となって世界を完全な堕落から救い、世の光となって人々に神を示すのです。

創世記4章はカインがアベルを殺すという恐ろしい出来事で始まりましたが、殺されたアベルの信仰は無駄にならず、セツに引き継がれました。ヘブル11:4が、アベルについて、「彼は死にましたが、その信仰によって、今もなお語っています」と言っているように、信仰者は世を去っても、その信仰は世を去ることなく、後の時代までも、神をあかしし、人々を励ますのです。このアベルの信仰から学び、私たちも主の御名を呼び求める人々のひとりになりたいと思います。

(祈り)

主なる神さま、アダムによって罪が世界に入り、死が入ってきましたが、イエス・キリストは、私たちを罪から救い、永遠の命を与えてくださる第二のアダムとなってくださいました。イエス・キリストを信じ、世から救われ、御国に入る人々が多く起こされますように。私たちもアベルのように信仰によって善きものをささげ、後の世までも信仰をあかしする者となれますように。主イエスのお名前です。

ノアの信仰 創世記 6:18-22

6:18 しかし、わたしはあなたと契約を結ぶ。あなたは、息子たち、妻、それに息子たちの妻とともに箱舟に入りなさい。

6:19 また、すべての生き物、すべての肉なるものの中から、それぞれ二匹ずつを箱舟に連れて入り、あなたとともに生き残るようにしなさい。それらは雄と雌でなければならない。

6:20 鳥は種類ごとに、動物も種類ごとに、また地面を這うすべてのものも種類ごとに、それぞれ二匹ずつが生き残れるよう、あなたのところに来なければならない。

6:21 あなたは、食べられるあらゆるものから採って、自分のところに集め、あなたとそれらの動物のための食物としなさい。」

6:22 ノアは、すべて神が命じられたとおりにし、そのように行った。

「ノアの箱舟」といえば、誰もが知っている聖書のストーリーで、おとぎばなしのように思われていますが、ノアは今から 4500 年ほど前、バビロニアにいた実在の人物で、大洪水も実際にあったことです。考古学者たちは、バビロニアの古代の町々のどこにでも何の遺跡も混じっていない粘土層を見つけており、これはノアの時代の大洪水によるものであると考えられています。ウルを発掘したペンシルバニア大学の C. L. ウーリー博士は厚さ 2.5 メートルの水溶性粘土層を見つけ、その下にさらに古い時代の都市の廃墟を見つけました。オックスフォード大学のスティーブン・ラングドン博士はキシユの町の粘土層の下に、四輪の戦車とそれをひいた動物の骨を発見し、その町が洪水で滅びたことを証明しています。ノアがいたと思われるファラの町は、ペンシルヴァ

ニア大学のエリック・シュミット博士によって発掘されました。洪水層の下に彩られた土器や円筒型の印章、壺や鍋などが見つかり、人々の生活の様子が、そのまま残されています。これは、その生活が突然の洪水によって滅んだことを示しています。

ノアの洪水やノアの箱舟のことは、とても興味深く、くわしく話せばきりのないことなので、きょうは、ノアの信仰に焦点をあててお話したいと思います。

一、時代に流されない信仰

ノアの信仰、それは第一に、「時代に流されない信仰」でした。創世記 6:11-12 は、ノアの時代について、こう言っています。「地は、神の前に墮落し、地は、暴虐で満ちていた。神が地をご覧になると、実に、それは、墮落していた。すべての肉なるものが、地上でその道を乱していたからである。」

なぜ、こうなったのでしょうか。それは、カインとカインの子孫が神を締め出した社会を作り出したからでした。けれども、セツとセツの子孫は、神を信じ、主の御名を呼び求めました。そして、ノアの時代までは、この人たちが「地の塩」の役割を果たし、世の中が全く墮落するのを防いでいました。ところが、何世代もたって、セツの子孫たちの信仰が衰えてきました。そして、彼らもまた神を信じない人々と同じ生き方をするようになったのです。

創世記 6:1-2 に「さて、人が地上にふえ始め、彼らに娘たちが生まれたとき、神の子らは、人の娘たちが、いか

にも美しいのを見て、その中から好きな者を選んで、自分たちの妻とした」とあります。ここで「神の子ら」とあるのはセツの子孫で信仰を持つ人たちのことです。

「人の娘たち」とあるのはカインの子孫で、信仰を持たない人たちのことです。ここには、信仰を持つ人たちが、信仰を持たない人たちの見かけの美しさにひかれ、信仰のことを考えないで家庭を作ったことが書かれています。そのため子どもたちに信仰を伝えることができず、神を信じる者たちが、神を信じない生き方に呑み込まれていったのです。

信仰を持つ私たちは、「世の中が悪くなった」と言って嘆きます。そしてそれを信仰を持たない人々のせいにしてしまいます。しかし、よく考えてみれば、世の中が悪くなったのには、信仰の歩みをないがしろにし、世の中の流れに乗り、それに同調してきた信仰者たちにも責任があるのです。

ローマ 12:2 に「この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい」と教えられています。「この世と調子を合わせる」というのは、英語では “be conformed”（同化させられる）です。「心の一新によって自分を変えなさい」は、“be transformed”（変化させられる）です。聖霊によって自分自身が変わられ、そして世の中を変えていく。それがキリスト者の生き方。だから、世の中の物の考え方や

生き方にまるめこまれ、呑み込まれてしまわないようにとの教えです。キリスト者がこの教えを忘れ、聖霊の力を失うとき、塩が塩気を失ったようになり、社会の腐敗をとどめる力を失ってしまうのです。

また、聖書はこう教えています。「すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。」（テモテ第一 2:1）信仰者がお互いのために祈るのは当然ですが、同時に、社会のため、自分の国のため、他の国々のため、世界のために祈り、その祈りの範囲を広げていく必要もあります。キリスト者の祈りが弱まる時、社会は混乱するのです。

創世記 8:9 に「ノアは、正しい人であって、その時代にあっても、全き人であった。ノアは神とともに歩んだ」とあります。「その時代にあっても」とあるように、ノアは、神の子らがこの世に吞まれていく中でもしっかりと信仰に踏みとどまりました。世に生きるかぎり、この世の影響は、誰にも避けられません。川に浮ぶものが、川の流れのままに上流から下流に流されていくのと同じです。しかし、川に住む生きた魚は流れを遡って上流に向かうことができます。私たちも、神からの命に生かされているなら、この世の流れに流されず、神に向かっていくことができるのです。

二、神のことばに従う信仰

ノアの信仰は第二に、「神のことばに従う信仰」でした。人々の墮落に心を痛められた神は大洪水によって世

界を新しくしようとされました。しかし、すべての人が滅びてしまったのでは人類が途絶えてしまいます。それで、神はノアに箱舟を作り、ノア夫妻と三人の息子夫妻、合計八名が箱舟によって、洪水から守られるようにしてくださいました。漢字で「船」という字は「舟」と「八」と「口」の三つの部分から成り立ちます。「口」は「人口百万人」などというように、人の数を表します。「船」という字を見るとき、「一つの舟に八人」が乗り込んだノアの箱舟のことを思い出してください。

ヘブライ語で「箱舟」には大切なものを入れて保護する「箱」という意味の言葉が使われています。英語で“ark”と言いますが、宝石箱も、神殿にあった契約の箱も“ark”です。モーセは生まれたとき、かごに入れられ、ナイル川の葦の茂みの中に置かれました。そのときの「かご」も、箱舟と同じ“ark”が使われています。赤ん坊のモーセを入れた「箱舟」とノア一家と様々な動物が入った「箱舟」とでは大きさは違いますが、どちらも、水に浮ぶように樹脂が塗られ（創世記 6:14、出エジプト記 2:3）、人の命を守るものでした。神はノア一家をまるで宝物を守るように箱舟で守ってくださったのです。

神は、ノアに箱舟のサイズを指定されました（15-16節）。聖書の単位は「キュビト」ですが、アメリカの単位に直せば、長さが150ヤード、幅が25ヤード、高さが15ヤードほどになります。フットボール・ピッチが115ヤード×75ヤードですので、箱舟を斜めにして置くとそこ

に収まります。この長さ、幅、高さの比率は現代の大型タンカーとほぼ同じで、最も波に強く、安定していると言われています。ノアとその家族、それに動物たちはおよそ一年の間箱舟に留まることになるのですが、この大きさなら、人々と動物たちが一年間過ごすために必要なものを蓄えることができます。神の設計に間違いはありません。22節に「ノアは、すべて神が命じられたとおりにし、そのように行った」とある通り、ノアは神のことばに従って、その指示どおりに箱舟を作りました。

神は私たちの人生にも、ご計画を持っておられ、それを設計してくださっています。そして、その設計は聖書に示されています。聖書は私たちに人生の意味を教え、目的を明らかにし、その道筋を指し示しています。ノアが神のことばに聞き従ったように、私たちも聖書に従うことによって、確かな歩みをしたいと思います。

三、将来を見つめる信仰

第三に、ノアの信仰は「将来を見つめる信仰」でした。ヘブル人への手紙 11 章には、信仰によって歩み、行動した人々のことが書かれています。最初はアベル、次はエノクで、三人目がノアです。ノアについてこう書かれています。「信仰によって、ノアは、まだ見ていない事がらについて神から警告を受けたとき、恐れかしこんで、その家族の救いのために箱舟を造り、その箱舟によって、世の罪を定め、信仰による義を相続する者となりました。」（ヘブル 11:7）ここで大事な言葉は、「まだ見ていない事がら」という言葉です。信仰とは、「ま

だ見ていない事がら」であっても、それが確かに起こると確信することです。ヘブル 11:1 は「信仰」を定義して「信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです」と言っています。目の前で起こっていることは、それをわざわざ「信じる」必要はありません。まだ見ていない事柄だからこそ、信仰が必要になってくるのです。

多くの人は、「信仰などいらぬ。私は何事でも、自分の目で確かめることにしているから」と言いますが、実際のところ、私たちが自分の目で見て確かめることができるものはそんなに多くはないのです。どこかへ出かけるたびに、車の部品の全部を点検する人は誰もいません。最近点検してもらったから大丈夫と、「信じて」運転します。今では、どの道路が混み合っているかチェックできます。しかし、その情報が正しいかどうかを自分で確認しているわけではありません。画面に映っている情報が正しいと「信じて」出かけるのです。私たちの毎日の生活の大部分は「信じる」ことで成り立っています。

過去のことは記憶の中にあり、現在のことは目で見て確かめることができますが、未来のことは、誰も見ることができません。ですから、明日のこと、将来のことについては、それを「信じる」しかないのです。そのとき、神を信じることがなければ、明日のこと、将来のことはすべてギャンブルのように不確実なものになってしまいます。そのため、人々は将来のことについて不安に

なり、希望を失ってしまうのです。そうでなければ、将来のことなど考えず、今を、自分のしたいように生きるようになってしまいます。イエスはノアの時代についてこう言われました。「洪水前の日々は、ノアが箱舟にはいるその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついだりしていました。」（マタイ 24:38）ノアの時代の人々は明日のことを考えませんでした。将来を見る目を失っていたのです。そのような中で、ノアは、まだ見ていない将来を見つめました。「見つめた」といっても実際に見えたわけではありません。「わたしは今、いのちの息あるすべての肉なるものを、天の下から滅ぼすために、地上の大水、大洪水を起こそうとしている。地上のすべてのものは死に絶えなければならない」（17節）との神の言葉によって、ノアはやがてやってくる大洪水を心に描き、それに備えました。

さらにノアは、やがて来るさばきだけでなく、その後やってくる救いを信じました。神はノアに言われました。「しかし、わたしは、あなたと契約を結ぼう。あなたは、あなたの息子たち、あなたの妻、それにあなたの息子たちの妻といっしょに箱舟にはいりなさい。」（18節）ノアは、神のさばきの宣告を聞いて恐れおののきましたが、同時に、神がくださった「救いの契約」によって希望を与えられました。

世に生きるかぎり苦しみは避けられません。しかし、大洪水のまっただ中でノアたちを箱舟によって守ってくださったように、神は、人生の様々な苦しみの中で苦し

みもがく私たちのために、ご自身が箱舟となって、私たちを守り、匿ってくださいます。どんな大雨も時がくればやみ、大洪水の水も必ず引いていきます。そのように神の救いは必ずやってきます。神に匿われていることが、たとえ箱の中に閉じ込められているように、窮屈に感じたとしても、そこで耐えましょう。「わたしは、あなたと契約を結ぼう」と言われた神がそれを成就してくださいます。ノアがまだ見ていない、洪水の後の世界を信仰によって確信したように、私たちも救いの成就を信じて進みましょう。

「時代に流されない信仰」、「神のことばに従う信仰」、そして、「将来を見つめる信仰」。このような信仰によって、時代に流されることなく、むしろ、この時代の人々に、神の救いをあかしする私たちでありたいと思います。

(祈り)

主なる神さま、あなたは、ノアに箱舟をくださったように、私たちにイエス・キリストをくださいました。イエス・キリストが、私たちを罪の世から救い出し、さばきから匿い、御国に導き、福音によって明日への希望を与えてくださるお方であることを感謝します。主イエスの福音を信じる信仰によって、この世の風雨を乗り越えて前進できるよう、私たちを導いてください。イエスのお名前です。

アブラハムの旅立ち

創世記 12:1-4

12:1 その後、主はアブラムに仰せられた。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。

12:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。

12:3 あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」

12:4 アブラムは主がお告げになったとおりに出かけた。ロトも彼といっしょに出かけた。アブラムがカランを出たときは、七十五歳であった。

アブラハムのもとの名前は「アブラム」で、創世記は同じひとりの人物を 17 章までは「アブラム」と呼び、それ以降は「アブラハム」と呼んでいます。メッセージでは分かりやすくするため、「アブラハム」と呼ぶことにします。アブラハムは今から 4000 年前、紀元前 2000 年の人でした。彼は、バビロニア地方の「ウル」という町に住んでいましたが、そこは、学校や図書館などがあって、高度な文化を誇っていました。「ハムラビ法典」有名なバビロンのハムラビ王はアブラハムと同時代の人物です。彼が作った「ハムラビ法典」を刻んだ石柱は 1902 年にイラクで発見され、ルーブル博物館に収められています。ところがアブラハムはそうした文化的な環境から離れて、当時はまだ未開の地であったカナンへと旅立ちました。それはなぜでしょうか。きょうはそのことをご

一緒に考えてみましょう。

一、神の召し

アブラハムの旅立ちには、第一に、神の「召し」によるものでした。「召し」という言葉は、どなたかが亡くなられたとき「天に召された」というときに使うくらいで、現代ではほとんど使われません。しかし、聖書ではよく使われます。それは、神が人を救いに招かれることを意味します。ローマ 8:30 に「神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました」とあります。神が、神から遠く離れていた者たちをご自分に近づけ、イエス・キリストの「義」（ただしさ）によって、信じる者を「義（ただ）しい者」と認め、神の栄光を表すものへと造りかえてくださることを言っています。

救われるためには、もちろん人間の側での信仰が必要ですが、神の召しは私たちの信仰に先立つものです。私たちが神を信じる前に、また、イエス・キリストを選ぶ前に、神がすでに私たちを選び、私たちを招いてくださっていたのです。罪ある人間は聖なる神に近づくことができません。それで神はご自分のほうから罪人をご自分に近づけてくださったのです。それが神の「召し」です。信仰とは、この「召し」に答えることです。そして、神の「召し」に答えたとき、その信仰によって、この「召し」を確認することができるのです。イエス・キリストを信じて救われた一人ひとは、義と認められ、

神の栄光にあずかる者にされたことを、信仰によって知るのです。

アブラハムはこの神の「召し」によって、カナン之地へと向かいました。創世記 11:31 に「テラは、その息子アブラムと、ハランの子で自分の孫のロトと、息子のアブラムの妻である嫁のサライとを伴い、彼らはカナン之地に行くために、カルデヤ人のウルからいっしょに出かけた」とありますから、アブラハムは最初は父親に従ってウルからハラン（カラン）までやってきたこととなります。テラは、もともとはカナンを目指していたのですが、ハランの住み心地がよかったのでしょうか、彼はそこに定住し、そこで生涯を終えました。アブラハムに神の召しがあったのはその時でした。神はアブラハムに言われました。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。」（1 節）父親が亡くなったとき、アブラハムは、ハランに留まることも、故郷のウルに引き返すこともカナンに向かうこともできました。アブラハムの目の前にはいくつかの選択肢があったのです。彼は、どこに進むべきか、迷い、また、考えたことでしょう。しかし、最終的には、アブラハムは神の言葉を求めました。神が示してくださる道に歩む決心をしました。そして、祈りのうちに神の言葉を待ち望んで、神の「召し」の言葉を聞き、それに答えて一步を踏み出したのです。

神は言われます。「わたしは、あなたの神、主である。わたしは、あなたに益になることを教え、あなたの

歩むべき道にあなたを導く。」（イザヤ 48:17）私たちの人生の歩みに、とくに、新しい歩みに入るとき必要なのは、神の導きです。神の召しを確認する信仰です。私たちもアブラハムのように神の導きを求め、その召しに聞き従いたいと思います。

二、神との交わり

アブラハムの旅立ちには第二に、さらに深い「神との交わり」に導かれるためのものでした。ヨシユア 24:2によると、アブラハムの父テラは「昔、ユーフラテス川の向こうに住んでおり、ほかの神々に仕えて」いました。アブラハムの故郷ウルでは月の神々、男性神のナンナルと女性神ニンガルの二体が崇拜されていました。ウルの発掘ではその神殿の遺跡も見つかっています。月の女神ニンガルはニーナとも呼ばれ、アッシリアの首都ニネベはその名にちなんでつけられほどで、古代世界では広く信仰されていました。テラはそのような偶像を崇拜する者でしたが、アブラハムはテラの子ではあっても、まことの神を信じる者でした。しかし、偶像礼拝の盛んな町では、アブラハムはその信仰を成長させることができませんでした。それは、ハランに移住してからも同じだったでしょう。ハランでもバビロニアの神々が崇められていたからです。もちろん、カナンに行っても、そこにはカナンの神々を崇める人々がいたでしょう。しかし、カナンはウルのような都会、ハランのような大勢の人がいる所ではなく、人口の少ないところでしたので、他の部族と距離をおいて生活することができました。神は、アブ

ラハムを異教や偶像から引き離し、ご自身とのさらに深い交わりの中へと導こうとなさったのです。

神がアブラハムをカナン之地に導かれたのは、アブラハムがまことの神との交わりを深めるためでした。アブラハムはカナンに着くと、どこに行っても、まずそこに祭壇を築き、主の御名によって祈っています（12:7-8）。アブラハムは、家族やしもべたちと一緒に安息日ごとに礼拝ささげたことでしょう。

この「安息日」のヘブライ語 שבת（シャバット）のもともとの意味は「断ち切る」で、安息日が時間の「区切りをつける」ものであることを表しています。私たちが100歳まで生きるとしたら、人の一生は36,525日になります。もし、この3万何千という日にちに何の区切りもなかったら、私たちの人生はダラダラとしたものになってしまうか、休息のない過酷なものになってしまいます。それで神は365日ごとに年を巡らせ、30日ごとに月を替えてくださるだけでなく、7日ごとに礼拝の日を与えて、私たちがいったん日常から解放されて神と交わり、仕事を休んで安息を得、癒やしを受けるようにしてくださったのです。礼拝のひとつきは、神がアブラハムをカナン之地へと召し、イスラエルに荒野を歩ませてくださったことのミニチュア版です。私たちも、巡ってくる日曜日ごとに、神の召しに答えて礼拝を守り、神に近づいていきたいと思えます。

三、祝福の基となるため

アブラハムの旅立ち第三に、彼自身が「祝福の基」

となるためでした。「召し」という言葉は、神が人にある役割を与えるときにも使われます。アブラハムがカナの地に旅立ったのは、神の召しによってでしたが、神はそのとき、アブラハムに一つの使命、任務をお与えになりました。

その使命、任務とは、「あなたの名は祝福となる」（2節）というものです。口語訳では「あなたは祝福の基（もと）となるであろう」と訳されています。アブラハムが他の諸民族の中から選ばれて、神の祝福を受け、その子孫が大きな民族となって繁栄するだけでなく、アブラハムの子孫が他の諸民族を祝福するものになる、それが「祝福の基」になるということです。このことは3節で、「地上のすべての民族は、あなたによって祝福される」という言葉で言い換えられています。

神の祝福を受ける。それは、ほんとうに幸いなことです。しかし、祝福を受けるよりももっと幸いなことがあります。それは、他の人に祝福を与えることです。それ以上の幸いはありません。他の人に祝福を与えることができるためにはまず自分が祝福されていなければなりません。ですから、神に自らの祝福を求めることは決して利己的なことでなく、神は、わたしたちが祝福を求めることを待っていてくださるのです。聖書はこう約束しています。「もし、あなたが、あなたの神、主の御声によく聞き従い、私が、きょう、あなたに命じる主のすべての命令を守り行なうなら、あなたの神、主は、地のすべての国々の上あなたを高くあげられよう。あなたがあ

あなたの神、主の御声に聞き従うので、次のすべての祝福があなたに臨み、あなたは祝福される。あなたは、町にあっても祝福され、野にあっても祝福される。あなたの身から生まれる者も、地の産物も、家畜の産むもの、群れのうちの子牛も、群れのうちの雌羊も祝福される。あなたのかごも、こね鉢も祝福される。」（申命記 28:1-5）

「あなたのかごも、こね鉢も祝福される」とあります。かごやこね鉢は台所で使うものです。これは、その一家が台所の隅々にいたるまで祝福を受けることを言っています。

しかし、このような神の祝福は、それを受けるだけで終わってはなりません。神の祝福を受けた者には、それによって他の人を祝福する務めが与えられています。アブラハムの子孫は、神の祝福を受けますが、それは、アブラハムの子孫だけがそれを独り占めするものではなく、他に分け与えるべきものでした。

そして、アブラハムの子孫に与えられた祝福の中で最高のものは神の言葉でした。アブラハムの子孫は、まわりの民族に、他の国々に神の言葉を伝え、それを証ししなければなりませんでした。ところが、彼らは、神は自分たちの民族だけを愛しておられ、異教徒を憎んでおられると考え、神の言葉を分かちあうことをしませんでした。いや、アブラハムの子孫であるのに、アブラハムの信仰に倣うことをせず、与えられた神の言葉に従わず、神から離れ、みずからの祝福さえも失ったのです。

では、神がアブラハムに与えた使命は果たされなかつ

たのでしょうか。いいえ、「アブラハムの子」として生まれたイエス・キリストが、その使命を果たしてくださいました。罪ののろいのすべてをご自分の身に引き受け、地上のあらゆる民族を祝福する祝福の基（もと）となってくださいましたのです。このことは新約でこう記されています。「そういうわけで、信仰による人々が、信仰の人アブラハムとともに、祝福を受けるのです。…このことは、アブラハムへの祝福が、キリスト・イエスによって異邦人に及ぶためであり、その結果、私たちが信仰によって約束の御霊を受けるためなのです。」（ガラテヤ3:9、14）アブラハムへの祝福の約束はユダヤの人々だけのものではなかったのです。本物の「アブラハムの子」であるイエス・キリストを信じる人々のものでもあるのです。私たちも、信仰によってアブラハムと同じ立場に立つことができるのです。キリストを信じる者もまた「アブラハム」の子孫です。アブラハムに約束された祝福を受け継いでいるのです。そればかりでなく、その祝福をさらに多くの人々と分かち合うという務めも受け継いでいるのです。

神の祝福を受け、それによって他の人々に祝福を分け与えるという幸いな人生、それはイエス・キリストを信じるすべての人に与えられます。神は私たちをそのような幸いな人生へ招いておられます。アブラハムのように、私たちも、イエス・キリストを信じて生きる新しい人生に向かって旅立つようにと招いていてくださいます。それに応えましょう。そして、私たちも「祝福の基

(もとい)」となり、神の祝福そのものとされていく、その恵みにあずかりたいと思います。

(祈り)

主なる神さま、あなたはアブラハムを召し、アブラハムはその召しに答えました。私たちも私たちの人生の道を自分の考えに頼り、まわりの人々に倣って決めるのではなく、あなたの召しに従って決め、祝福の道を歩むことができるよう導いてください。イエス・キリストを信じて歩むことによって、私たちをも他の人々の「祝福」となれるよう助けてください。主イエスのお名前です。

人を富ませるお方

創世記 14:14-24

14:14 アブラムは自分の親類の者がとりこになったことを聞き、彼の家で生まれたしもべども三百十八人を召集して、ダンまで追跡した。

14:15 夜になって、彼と奴隷たちは、彼らに向かって展開し、彼らを打ち破り、ダマスコの北にあるホバまで彼らを追跡した。

14:16 そして、彼はすべての財産を取り戻し、また親類の者ロトとその財産、それにまた、女たちや人々をも取り戻した。

14:17 こうして、アブラムがケドルラオメルと、彼といっしょにいた王たちとを打ち破って帰って後、ソドムの王は、王の谷と言われるシャベの谷まで、彼を迎えに出て来た。

14:18 また、シャレムの王メルキゼデクはパンとぶどう酒を持って来た。彼はいと高き神の祭司であった。

14:19 彼はアブラムを祝福して言った。「祝福を受けよ。アブラム。天と地を造られた方、いと高き神より。

14:20 あなたの手に、あなたの敵を渡されたいと高き神に、誉れあれ。」アブラムはすべての物の十分の一を彼に与えた。

14:21 ソドムの王はアブラムに言った。「人々は私に返し、財産はあなたが取ってください。」

14:22 しかし、アブラムはソドムの王に言った。「私は天と地を造られた方、いと高き神、主に誓う。

14:23 糸一本でも、くつひも一本でも、あなたの所有物から私は何一つ取らない。それは、あなたが、『アブラムを富ませたのは私だ。』と言わないためだ。

14:24 ただ若者たちが食べてしまった物と、私といっしょに行った人々の分け前とは別だ。アネルとエシュコルとマムレには、彼らの分け前を取らせるように。」

一、アブラハムの財産

神はアブラハムに「わたしはあなたを祝福する」と約

束されました。神の祝福は本来は目に見えない、霊的なものです。しかし、まったく目に見えないかというと、そうでもありません。神の祝福の中で最高のものは「永遠の命」だと言われ、「永遠の命」そのものは目に見えませんが、その命から生み出されてくるものは目に見えます。「永遠の命」の祝福を受けている人の人生には、なんらかの目に見える結果が生じてきます。神は、そうした見える結果によって、見えない霊的な祝福を証ししてくださるのです。

アブラハムの場合は、その財産、つまり、家畜の群れが増えていったことが祝福の証しのひとつでした。アブラハムの父テラは多くの家畜を連れてウルからハランまでやってきました。テラが亡くなったとき、アブラハムはウルからのものにハランで加えられた家畜やしもべたちをテラから引き継ぎ、カナンの地に向かったのです。創世記 12:5 に「アブラムは妻のサライト、おいのロトと、彼らが得たすべての財産と、カランで加えられた人々を伴い、カナンの地に行こうとして出発した。こうして彼らはカナンの地にはいった」とある通りです。

アブラハムは一時エジプトに滞在しましたとき、牛、羊、ろば、らくだや男女の奴隷を手に入れています（創世記 12:16）。創世記 13:2 には「アブラムは家畜と銀と金とに非常に富んでいた」とあります。

アブラハムは甥のロトと一緒にでしたが、ロトの家畜の群れも大きくなり、ロトのしもべとアブラハムのしもべたちとの間に遊牧地を巡ってのトラブルが起りました。

た。それで二人は別れて住むことになり、ロトは低地に向かい、アブラハムは山地に行って、そこで家畜を養いました。

その後、神はアブラハムに言われました。「さあ、目を上げて、あなたがいる所から北と南、東と西を見渡しなさい。わたしは、あなたが見渡しているこの地全部を、永久にあなたとあなたの子孫とに与えよう。わたしは、あなたの子孫を地のちりのようにならせる。もし人が地のちりを数えることができれば、あなたの子孫をも数えることができよう。立って、その地を縦と横に歩き回りなさい。わたしがあなたに、その地を与えるのだから。」（創世記 13:14-17）神は、アブラハムに今ある財産だけでなく、見渡す限りの土地を彼の子孫に与えると約束してくださいました。アブラハムは多くの財産を得、それを感謝しましたが、決して、その財産に満足したり、頼ったりしませんでした。アブラハムの目はもっと将来にありました。彼の子孫がカナン土地に増え広がり、地に住むすべての人の祝福となるという、まだ見ていないことを信じ、その約束に頼ったのです。

神を信じる私たちも、地上の財産を神の祝福として感謝して受けます。財産というと、不動産や自動車、家具、宝石、衣類、株や現金などを思い浮かべますが、じつは、それ以上に大切な財産があります。それは、家族や友人です。家族や友人は何物にも替えられない素晴らしい財産です。いつも身近にいる家族を、時にはうっとりしく感じられることもあるでしょうが、家族や友人を

失ってみると、それがどんなに大きな祝福であったかが分かります。けれども、私たちは地上のものだけで満足したり、それにすべての信頼を置くようなことはしません。地上の祝福は、やがて天でさらに大きな祝福にあずかる「しるし」に過ぎません。私たちは、祝福の「本体」である神に頼り、将来の天の祝福を待ち望むのです。

時には目に見える祝福が取り去られることもあります。イエスが話された「ラザロと金持ち」のたとえ話では、金持ちの家の前に置かれていた物乞いは、財産どころか、その日の食べ物さえありませんでした。その上、彼は、明日の命も分からない病気にかかっていました。そんな彼の貧しさや病気を、人々は「のろい」だと考えたでしょう。しかし、そこには、この人を究極の祝福に導くための神の深いお心がありました。この人には「ラザロ」という名が与えられていますが、この名はヘブライ語で「エレアザル」、「神はわが助け」という意味です。ラザロは目に見える祝福の「しるし」が見えない中でも、神を信じ、神に頼りました。彼は「しるし」なしに、まっすぐに天の祝福を信じたのです。そしてその生涯を終えたとき、彼のたましいは御使いに携えられてパラダイスに行きました。このことは、神が神を信じる者の名を知っておられ、その名が天にしるされ、その名の持ち主はさらに豊かな祝福の場所へと迎えられることを教えています。

たとえ地上の「しるし」が見えなくても、私たちは天

の祝福を信じてそれを目指すべきなのですが、神は、信仰の弱い私たちのために、さまざまな形で目に見えるものを与え、私たちがやがて究極の祝福を受け継ぐことを確信させ、それを待ち望ませてくださるのです。

二、アブラハムの勝利

アブラハムとロトとはそれぞれ別々のところに住むことになりましたが、アブラハムは常にロトのことを気づかっていました。ソドムやゴモラと近くの町々の王たちは、長く東方のケダラオメルとその連合国に仕えていたのですが、それに背いたため、ソドムとゴモラの町は連合国の遠征軍に打ち負かされ、町の人々と財産、食糧が奪われました。ソドムにいたロトもそれに巻き込まれ、遠征軍に連れ去られました。

それを聞いたアブラハムは自分のしもべ 318 人を連れて、ロトの救出に向かいました。この「しもべ」というのは、普段はアブラハムの家畜を守っている「牧者」たちでした。そんな「素人」が「軍人」を相手に戦って勝てるのだろうか、誰もが思います。しかし、これらの牧者たちは、略奪隊や野獣から家畜を守る訓練を受けており、軍隊を相手に戦う力を持っていました。緻密な作戦と迅速な行動があれば、「小よく大を制す」ことができるのです。遠征軍の弱点は相互の連携と補給路です。アブラハムとその牧者たちは、相互の連携と補給路を絶ち、彼らを追い払ったのでしょう。アブラハムはロトとその財産、また、ソドムの町の人々とその財産を無事に取り戻しました。

アブラハムの財産は、多数の家畜と金銀だけではありませんでした。彼は、勇敢で従順なしもべたちを持っていました。現代の言葉で言えば、資本や技術だけでなく、優秀な人材を持っていたのです。どんな事業でも、大きな資本があるから、何百という特許を持っているから成功するとは限りません。多くの場合、成功の鍵は「人材」です。アブラハムはそういう意味では、人材を育て、束ねることのできる理想的な CEO の一人でした。いいえ、「アブラハム・ファーム」のほんとうの CEO は神ご自身でした。多くのキリスト者の実業家たちが「社長は神さまです。私は副社長です」と言っているように、アブラハムもまた、神を主とすることによって大勢の牧者たちを治めることができたのです。

アブラハムの勝利の秘密はしもべたちを大切に扱ったことにあります。アブラハムは、神を知らない主人たちのように、わがまま勝手に、また、理不尽にしもべたちを苦しめたり、酷使したりしませんでした。だから、しもべたちはアブラハムとともに命がけで戦ったのです。アブラハム自身が神を主とし、自らをしもべとして仕えた、その信仰が、この勝利をもたらしたのです。神への信仰、神との交わり、そしてそれに基づいた良い主人としもべの関係、それがアブラハムの勝利と祝福の秘訣でした。私たちもまた、勝利と祝福の人生を歩むため、この秘訣を自分のものにしていきたいと思います。

三、アブラハムの礼拝

ソドムの王は自分の町の人々と財産を取り戻してくれ

たアブラハムを迎えるためシャベの谷までやってきました。そこは、今日のエルサレムに近い場所ではなかったかと思われます。それは、エルサレムのもとの名が「シャレム」で、そのシャレムの王、メルキゼデクもアブラハムを迎えに来たからです。「シャレムの王」は「平和の王」、「メルキゼデク」は「義の王」という意味です。メルキゼデクは王であり、同時に神の祭司でした。カナンの地にも、まことの神を知り、まことの神に仕える人がいたのです。メルキゼデクは「祝福を受けよ。アブラム。天と地を造られた方、いと高き神より。あなたの手に、あなたの敵を渡されたいと高き神に、誉れあれ」と言ってアブラハムを祝福し、共に神を礼拝しました。メルキゼデクはアブラハムに「パンとぶどう酒」を与え、アブラハムはメルキゼデクに十分の一のさげものをしました。

しかし、ソドムの王が「人々は私に返し、財産はあなたが取ってください」と言ったときには、その申し出をきっぱりと断っています。アブラハムはソドムやゴモラの町の不道徳を耳にしていたので、ソドムの王と関わりを持つことを避けたのです。アブラハムは言いました。「私は天と地を造られた方、いと高き神、主に誓う。糸一本でも、くつひも一本でも、あなたの所有物から私は何一つ取らない。それは、あなたが、『アブラムを富ませたのは私だ』と言わないためだ。」

では、アブラハムを富ませたのは誰でしょうか。それは「天と地を造られた方、いと高き神、主」です。「天

と地を造られた方、いと高き神」とは、メルキゼデクがアブラハムへの祝福の中で使った言葉です。アブラハムは祝福の言葉を繰り返すことによって、「私を富ませ、祝福してくださるのは、天と地を造られた、いと高き神である」という信仰を告白したのです。アブラハムは「天と地を造られた方、いと高き神」に、さらに「主」という神の御名を加えています。この「主」は、「主人」、「主権者」という言葉ではなく、「ヤーウェ」や「アドナイ」と呼ばれる神の固有のお名前です。アブラハムは、彼の財産も、その組織された集団も、この作戦の勝利も、すべて主なる神からのものであると言って神に栄光をお返しし、ソドムの王にまことの神を証しました。

人は、才能にしろ、財産にしろ、それらに恵まれ、また、自分のしたことが成功すると、「これは私がやったのだ」と自分を誇りたくなるものです。神を信じない人々は自分を誇り、また人間をほめそやしますが、神を信じる者は、この祝福は神が与えてくださったものであることを覚えて、なによりも神に感謝し、神をほめたたえます。

今年もサンクスギビングデーを迎え、私たちは互いに感謝を交わしますが、本来のサンクスギビングデーは、互いに感謝しあう以前に、神に感謝をささげる日でした。私たちが今得ている祝福の一つひとつは主なる神から来ています。そのことを知って、目に見えるものにおいても、信仰においても、「私たちを富ませてくだ

さったのは主です」と、神に感謝し、神をほめたたえてこの週を過ごしたいと思います。

(祈り)

主なる神さま、あなたこそ、私たちを豊かにし、強くしてくださるお方です。アブラハムが祭司メルキゼデクを通してあなたを礼拝したように、私たちもあなたをあがめる者としてください。また、アブラハムがソドムの王に祝福のみなもとであるあなたを証ししたように、私たちもあなたを証しする者としてください。主イエスのお名前で祈ります。

福音と日本文化 ②⑥ 一あとがきにかえて

使徒パウロは第一コリント 15:3-4で「キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書に従って三日目によみがえられたこと、…」と書いています。この箇所で「聖書の示すとおりに」と訳されている部分も、「聖書に従って」と訳されている部分も原語では同じです。パウロが、繰り返しをいとわず、「聖書に従って」という言葉を二度も使ったのは、キリストの十字架と復活が、じつに、聖書に預言されたとおりに実現した、聖書の中心的な出来事であることを言おうとしたことだったと思います。

ニケア・コンスタンチノーブル信条でも、キリストの十字架と復活について、「主は、わたしたち人間のため、またわたしたちの救いのために、天より降り、聖霊によって、おとめマリアより肉体を取って、人となり、わたしたちのためにポンテオ・ピラトのもとで十字架につけられ、苦しみを受け、葬られ、聖書に従って、三日目によみがえり、天に昇られました」と、第一コリント 15:3-4にある「聖書に従って」という言葉がそのまま使われています。これは、この信仰告白が聖書に基づくものであるとの主張ともなっています。

聖書なしには福音は無く、福音なしには信仰が無く、信仰なしには本物の教会は無いのです。どの文化における福音宣教においても、聖書がその基盤です。いつの時代、どこでも `Back to the Bible、`が必須なのです。



Penguin Club
www.penguinclub.net